

# 一九二八年 三月十五日

——映画文学人生論

原作：小林多喜二（1928）「戦旗」

参考：『蟹工船』（1909）（1953）

監督：山村聡

出演：飲んだくれの松木 山村聡

船医谷口 森雅之

監督浅川 平田未喜三

脚色：山村聡

撮影：宮島義勇

音楽：伊福部昭

お前、そのう、主義者だか、なんだかになつたんではないだらうねえ

三月十五日を忘れるな！という落書が小樽警察の壁に入念に刻みこまれていた——小林多喜二の処女作の結末である。

一九二八・三・一五！

田中反動内閣を殺せ。

共産党万歳。

労働農民党万歳。

万国の労働者団結せよ。

三月十五日を覚えてろ。

一九二八年は昭和三年、私がこの世に生まれる前の話だ。日本史には興味を持っているが、昭和前期の歴史は暗すぎる。

三月十五日には警察が全国の共産党員とその同調者ら千数人を治安維持法違反容疑で一斉に検挙・勾留した。六月四日には満州国某重大事件で、張作霖が奉天の郊外で爆殺された。陸軍省は「中国革命軍のしわざ」と言明したが、実際には関東軍の謀略だった。

こんな物騒な歴史の真相は知りたくもない。忘れたふりをして、放っておこうと思ったが、やはり気になり、読んでみた。この小説の初稿は『戦旗』に発表される際、編集者が検閲を考慮して伏



# 一九二八年三月十五日

映画文学人生論

字や削除で切り抜けようとし、冒頭の落書も削除した。それでも掲載誌は発売禁止になったが、戦旗社の販売網を通じて広く読まれ、大きな反響をよびおこしたという。

発売禁止処分となったのは警察による残酷な拷問の描写があるためといわれている。拷問を受けたのは〇市（北海道小樽市）の合同労働組合の幹部たちだ。

佐多という銀行員も逮捕・拘留されて、母親を悲しませた。八年間、苦勞して高商で学ばせ、銀行から毎月月給を貰えるようになったのに息子は労働運動にいれあげている様子。「おまえ、そのう、主義者だか、なんだかに、なったのではないだろうねえ」と母親は心配するが、結局、逮捕されてしまう。

佐多が拷問を受けた描写はないが、作者の小林多喜二は、その後昭和八年二月二十日に、逮捕され、築地警察で拷問を受けて死んだ。

残酷な拷問ぶりは安政の大獄で捕らえられた志士たちへの拷問を連想させられる。徳川幕府は安政の大獄の十年後には崩壊し、大日本帝国は三月十五日事件の十七年後に崩壊した。

一方、共産主義国のソ連でも拷問が行われていたことがはソルジェニーツィン『収容所群島』で知らされた。ソ連の崩壊は一九九一年。

多喜二忌や麻生二の橋三の橋

伊藤ふじ子